

## 『私の戦争体験』

### 大阪大空襲と終戦前日

お話：藤田 義雄さん(太田在住)

(平成 27 年 8 月 4 日 FM ちゃお放送)



司会

昭和 20 年当時、藤田さんはどういったお仕事をされておりましたか。

藤田さん

当時、私は大阪府警察局の警備隊に所属していました。管轄地域の方と防火訓練をしていましたが、焼夷弾が1個くらいしか落ちてこないだろうという前提でバケツリレーや縄に水をつけてハタキのようにして火を消すなどの訓練をしていました。今、考えると、こんな方法で火が消せるとは思いもしませんが、当時はそういった訓練をしていました。

司会

木造住宅の多い地域では建屋疎開がされていたそうですが、建屋疎開とはどういったことをするのでしょうか。

藤田さん

空襲があったときに、火が燃え広がらないように家屋を強制的に倒していました。まずは対象となった家屋の外回りの柱に大工さんが切り口を入れて、地域の人や学生と一緒にひっかけたロープを「よいこらしよ、よいこらしよ」とひっぱって倒していききました。建物をどかせたあとには、防火水槽を置きました。

司会

そうして、昭和 20 年 3 月 13 日の大阪大空襲の日が来たわけですが、その日のことについて教えてくださいませんか。

藤田さん

午後 11 時頃、その日は宿直でほかの人と一緒に宿舎にいましたが、同僚の一人が窓の向こうで、炎が燃え上がっているのを見つけて、みんなを呼びました。空襲警報が鳴り響き、サーチライトが空

を慌ただしく照らしていました。ラジオからは「大阪湾より敵機が潜入せり、我が方も戦闘機で迎え撃つ」といった内容が流れていたように思います。私たちは、これは大変だなーと思いました。すると、上司から避難するように言われ、外へ出ましたが、大阪湾の方から逃げてくる人がたくさんいました。人であふれた道路の中に私も入りこんで、人の波に流されるように避難しました。

司会

そのときの空襲の様子はどのようなものでしたか。

藤田さん

まさに火の雨のようでした。B29がいっぱいになってやってきて、焼夷弾を落としていったのです。焼夷弾にはガソリンのような液体を入れた数十本の金属筒が詰められていて、それらが落ちてくる途中で自然に発火して、燃えながら落ちてきました。それが火の雨のように見えました。

司会

避難するときの周りの様子はいかがでしたか。

藤田さん

避難している際に、若いお母さんが、乳児を背負い、布団には幼児をのせて、自分の着物の裾をけりながら逃げているのを見ました。

そのほかにも、老夫婦がリヤカーに家財道具をいっぱいおせて、線路上で立ち往生している姿を見かけました。まわりの人は、自分が逃げるのに精いっぱい手伝いはできない状況でした。老夫婦は私に近寄ってきて、手伝ってくれと頼んできたので、断りきれずに手伝いました。また、ある婦人から家の火を消してほしいとお願いされ、バケツリレーに加わりましたが、燃え広がる火の勢いをおさめることはできませんでした。

ようやく、火のない広場へ行きましたが、混乱状態の中で皆が家族の名前を叫んで探していました。生き地獄のようでした。

3 月の夜で、まだまだ寒い季節のはずですが、燃え広がる火の熱さに耐えられず、水をかぶりました。それでも、濡れた服は、少し時間が経つと乾いてしまったように思います。

午前 5 時頃、異常な臭いがたちこめ、顔にはススが付き、目も充血して、しっかりあけられない状態でした。辺りでは、熱風が竜巻のように吹き上がり、トタンが舞い上がっては落ちてきたので、避けるのに必死でした。建物の跡形もなく、見渡す限りが焼野原になっていました。そして、黒い雲から黒い雨が降り出しました。

午前 7 時頃になって、ようやく「引き揚げよ」との命

令がありました。この空襲で、子どもや女性を含めてたくさんの方が犠牲になりました。何のための防火訓練だったのだろうと思いました。

その後、昭和20年6月1日には、金岡、軽重兵第四連隊中部第三十一部隊に入隊しました。リヤカーを敵の戦車代わりにして、敵の上陸にそなえた訓練をしていました。

司会

続いて、昭和20年8月14日の話になりますが、当時、藤田さんはどちらにおられましたか。

藤田さん

私は大阪城の付近で、本土決戦にそなえた軍事作戦室の建設工事をしていました。朝から天気の良い日でしたが、警戒警報のサイレンが鳴り響いていました。「本日の仕事は中止、天守閣内で待機せよ」との命令がありました。そして、空襲警報が鳴った矢先、ズドーンズドーンと連続したすごい音と強烈な地響きがありました。近くの水道管が破裂し、噴水のように湧き上がりました。私は大阪城入口の石垣付近で身をかがめて、様子をうかがっていると、B29の爆音が聞こえ、かなり低空飛行でやってきました。B29の下側が光ったのを見た瞬間、爆弾だと思い奥へと逃げ込みました。すると、ズドーンという音とともに強烈な地響きがあり、立ってられない状況で、額を何度も地面にぶつけました。もし、爆弾が落ちた側にいたら、間違いなく私は木端みじんになっていたと思います。大阪城のすぐそばには砲兵工廠があり、そこを狙って爆弾が落とされていました。そのときの弾痕は今も大阪城の石垣に残っています。

私は、班長へ逃げようと言いましたが、班長はどこへ行っても同じだと言って動こうとしませんでした。私は、近くのコンクリート造りの建物へ逃げ込もうとしましたが、その入口にはたくさんの兵隊が集まっていて、下士官が「ここには入ってはならん」と大声で怒鳴りちらしていました。それでも私は、なんとか建物に入ろうとして裏側にまわりこんでみると、小さなドアを見つけ、運よくそのドアは開いていました。その部屋では、映画館のようなスクリーンに地図が映され、敵の飛行機や爆弾が落とされたところが示されていました。それからどれくらいの時間が経ったかは分かりませんが、外に出てみると、嘘のような静けさで、太陽が照りつけ暑さを覚えました。天守閣は被害を受けていなかったのでも、頂上に上がり周りを見てみると、砲兵工廠は爆弾により破壊され、鉄骨はひんまがり、爆弾のあとが数えきれないほどありました。

司会

最後に、戦争を体験され、いろいろな思いをされたと思いますが、次世代に平和の大切さを伝えるためのメッセージをお願いします。

藤田さん

今の大阪城は豊かな緑に囲まれ、外国人の観光客もたくさんいて、平和を感じられると思います。それでも、大阪城の石垣には戦争当時の爆弾のあとが今も残っています。多くの方が犠牲になった戦争を二度と繰り返さないためにもこの話を後世へと語り継いでほしいと思います。

司会

ありがとうございました。